

## 1 1 変数多項式の終結式

多項式の係数はいずれも整域  $R$  の元としておく．こうしておくと多項式の係数を商体  $\text{Rat}(R)$  の元として分数に拡張できる．さらに方程式の解は代数閉包  $\overline{\text{Rat}(R)}$  上で考えられる．もしかしたら  $R$  を UFD くらいに仮定しといた方が安全かもしれない．

**定義 (終結式).** 多項式  $f(x) = \sum_{i=0}^m a_m x^i$  と  $g(x) = \sum_{j=0}^n b_n x^j$  ( $a_m, b_n \neq 0$ ) に対して

$$\text{Syl}(f, g) := \begin{bmatrix} a_m & a_{m-1} & \cdots & a_1 & a_0 & & & \\ & a_m & a_{m-1} & \cdots & a_1 & a_0 & & \\ & & \ddots & \ddots & & \ddots & \ddots & \\ & & & a_m & a_{m-1} & \cdots & a_1 & a_0 \\ b_n & b_{n-1} & \cdots & b_1 & b_0 & & & \\ & b_n & b_{n-1} & \cdots & b_1 & b_0 & & \\ & & \ddots & \ddots & & \ddots & \ddots & \\ & & & b_n & b_{n-1} & \cdots & b_1 & b_0 \end{bmatrix} \begin{matrix} \left. \vphantom{\begin{matrix} a_m & a_{m-1} & \cdots & a_1 & a_0 \\ & a_m & a_{m-1} & \cdots & a_1 & a_0 \\ & & \ddots & \ddots & & \ddots & \ddots \end{matrix}} \right\} n \\ \left. \vphantom{\begin{matrix} b_n & b_{n-1} & \cdots & b_1 & b_0 \\ & b_n & b_{n-1} & \cdots & b_1 & b_0 \\ & & \ddots & \ddots & & \ddots & \ddots \end{matrix}} \right\} m \end{matrix}$$

を  $f$  と  $g$  のシルベスター行列といい，その行列式

$$\text{resul}(f, g) := \det(\text{Syl}(f, g))$$

を  $f$  と  $g$  の終結式 (**resultant**) という．なお，零でない定数  $g(x) = b_0 \neq 0$  に対しては

$$\text{Syl}(f, b_0) = \begin{bmatrix} b_0 & & \\ & \ddots & \\ & & b_0 \end{bmatrix}, \quad \text{resul}(f, b_0) = b_0^m$$

であり，同様に  $\text{resul}(a_0, g) = a_m^n$  である．また， $\text{resul}(f, 0) = \text{resul}(0, g) = 0$  と定める．

**注意.** 上で定義した  $\text{Syl}(f, g)$  の転置行列をシルベスター行列と呼ぶ流儀もある．

**例 1.**  $f(x) = x^3 + 1$ ,  $g(x) = x^2 + 2x + 1$ ,  $h(x) = x^2 + 1$  とする．

$$\text{resul}(f, g) = \begin{vmatrix} 1 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 & 1 \\ 1 & 2 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 2 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 2 & 1 \end{vmatrix} = 0, \quad \text{resul}(f, h) = \begin{vmatrix} 1 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 & 1 \\ 1 & 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & 1 \end{vmatrix} = 2$$

次の定理 1 から， $f, g$  は共通根を持ち， $f, h$  は共通根を持たないことがわかる．

以下,  $f, g$  は次のような多項式とする. ただし,  $a_m, b_n \neq 0$  とする.

$$f(x) = \sum_{i=0}^m a_i x^i = a_m \prod_{i=1}^m (x - \alpha_i), \quad g(x) = \sum_{j=0}^n b_j x^j = b_n \prod_{j=1}^n (x - \beta_j)$$

**定理 1.**  $f$  と  $g$  は共通根を持つ.  $\iff \text{resul}(f, g) = 0$ .

**証明.**  $(\Rightarrow)$   $f(\gamma) = g(\gamma) = 0$  とすると,  $\gamma^i f(\gamma) = \gamma^j g(\gamma) = 0$  なので以下が成り立つ.

$$\begin{bmatrix} a_3 & a_2 & a_1 & a_0 & 0 \\ 0 & a_3 & a_2 & a_1 & a_0 \\ b_2 & b_1 & b_0 & 0 & 0 \\ 0 & b_2 & b_1 & b_0 & 0 \\ 0 & 0 & b_2 & b_1 & b_0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \gamma^4 \\ \gamma^3 \\ \gamma^2 \\ \gamma \\ 1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{bmatrix} \quad (m=3, n=2 \text{ の場合})$$

同次形連立 1 次方程式  $\text{Syl}(f, g)\mathbf{x} = \mathbf{0}$  が非自明解を持つので  $\text{resul}(f, g) = 0$  である.

$(\Leftarrow)$  以下の補題 1 より従う. □

**補題 1.**  $\text{resul}(f, g) = a_m^n b_n^m \prod_{i=1}^m \prod_{j=1}^n (\alpha_i - \beta_j)$

**証明.** 定理 1 の  $(\Rightarrow)$  から  $\alpha_i = \beta_j$  のとき  $\text{resul}(f, g) = 0$  なので, 因数定理より  $T := \prod \prod (\alpha_i - \beta_j)$  は  $\text{resul}(f, g)$  を割り切る. そこで, 各  $\alpha_i, \beta_j$  の多項式として  $\text{resul}(f, g)$  と  $T$  の次数を評価し, 係数を比較すればよい.

$$\begin{aligned} f(x)/a_m &= x^m + A_1 x^{m-1} + \cdots + A_m = \prod_{i=1}^m (x - \alpha_i), \\ g(x)/b_n &= x^n + B_1 x^{n-1} + \cdots + B_n = \prod_{j=1}^n (x - \beta_j) \end{aligned}$$

とすると,  $m=3, n=2$  の場合

$$\text{resul}(f, g) = a_3^2 b_2^3 \begin{vmatrix} 1 & A_1 & A_2 & A_3 & 0 \\ 0 & 1 & A_1 & A_2 & A_3 \\ 1 & B_1 & B_2 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & B_1 & B_2 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & B_1 & B_2 \end{vmatrix}$$

である. 各  $A_k$  は  $\alpha_1, \dots, \alpha_m$  の, 各  $B_k$  は  $\beta_1, \dots, \beta_n$  の  $k$  次基本対称式の  $\pm 1$  倍である. また, 各  $A_i, B_j$  はそれぞれ  $\alpha_i, \beta_j$  の 1 次式なので,  $\text{resul}(f, g)$  は  $\alpha_i$  に関して高々  $n$  次で,  $\beta_j$  に関して高々  $m$  次である. 従って,  $\text{resul}(f, g)$  は  $T$  の定数倍であり,  $\alpha_1^n$  の係数を比較して,  $\text{resul}(f, g) = a_m^n b_n^m T$  がわかる. □

**例 2.**  $f(x) = ax^2 + bx + c$  ( $a \neq 0$ ) とする.  $f'(x) = 2ax + b$  であり,

$$\text{resul}(f, f') = \begin{vmatrix} a & b & c \\ 2a & b & 0 \\ 0 & 2a & b \end{vmatrix} = -a(b^2 - 4ac)$$

より,  $b^2 - 4ac = 0$  のとき  $f, f'$  は共通根を持つ. また, このとき  $f$  は重根を持つ.

**定理 2.** 非定数多項式  $f$  に対して, 以下は同値.

(1)  $f$  は重根を持つ. (2)  $f, f'$  は共通根を持つ. (3)  $\text{resul}(f, f') = 0$ .

**定理 3.**

$$\text{resul}(f, f') = (-1)^{m(m-1)/2} a_m^{2m-1} \prod_{1 \leq i < j \leq m} (\alpha_i - \alpha_j)^2$$

**証明.** 補題 1 より, 一般に

$$\text{resul}(f, g) = a_m^n b_n^m \prod_{i=1}^m \prod_{j=1}^n (\alpha_i - \beta_j) = a_m^n \prod_{i=1}^m \left( b_n \prod_{j=1}^n (\alpha_i - \beta_j) \right) = a_m^n \prod_{i=1}^m g(\alpha_i)$$

が成り立つ. これを  $g = f'$  として適用して

$$\text{resul}(f, f') = a_m^{m-1} \prod_{i=1}^m f'(\alpha_i)$$

を得る.  $f'(x) = a_m \sum_{i=1}^m \prod_{\substack{j=1 \\ j \neq i}}^m (x - \alpha_j)$  より  $f'(\alpha_i) = a_m \prod_{\substack{j=1 \\ j \neq i}}^m (\alpha_i - \alpha_j)$  から従う. □

**定義 (判別式).** 2 次以上の多項式  $f$  に対して以下の  $\text{disc}(f)$  を  $f$  の判別式という.

$$\text{disc}(f) = a_m^{2m-2} \prod_{1 \leq i < j \leq m} (\alpha_i - \alpha_j)^2 = \frac{(-1)^{m(m-1)/2}}{a_m} \text{resul}(f, f')$$

定理 2, 3 より,  $f$  が重根を持つことと  $\text{disc}(f) = 0$  は同値である.

**例 3.**  $f(x) = x^3 + px + q$  とする.  $f'(x) = 3x^2 + p$  より,  $\text{disc}(f)$  は以下の通り.

$$\text{disc}(f) = (-1)^3 \text{resul}(f, f') = - \begin{vmatrix} 1 & 0 & p & q & 0 \\ 0 & 1 & 0 & p & q \\ 3 & 0 & p & 0 & 0 \\ 0 & 3 & 0 & p & 0 \\ 0 & 0 & 3 & 0 & p \end{vmatrix} = -(4p^3 + 27q^2)$$

**定理 4.**  $f$  を実係数 3 次多項式とする.

$$\text{disc}(f) = \begin{cases} > 0 & (f \text{ は相異なる 3 個の実根を持つ}) \\ = 0 & (f \text{ は重根を持ち, どの根も実数}) \\ < 0 & (f \text{ は 1 個の実根と 2 個の互いに共役な虚根を持つ}) \end{cases}$$

**証明.**  $f$  の根  $\alpha_1, \alpha_2, \alpha_3$  が互いに相異なる実数のとき, 定義から  $\text{disc}(f) > 0$  である.  $f$  が重根を持つとき,  $\text{disc}(f) = 0$  である.  $\alpha_1$  が実数で  $\alpha_2, \alpha_3$  が互いに共役な虚数のとき,

$$\begin{aligned} \text{disc}(f) &= a_m^{2m-2} (\alpha_1 - \alpha_2)^2 (\alpha_1 - \alpha_3)^2 (\alpha_2 - \alpha_3)^2 \\ &= a_m^{2m-2} ((\alpha_1 - \alpha_2) (\overline{\alpha_1 - \alpha_2}))^2 (2i(\Im \alpha_2))^2 = -4a_m^{2m-2} |\alpha_1 - \alpha_2|^2 (\Im \alpha_2)^2 < 0 \end{aligned}$$

である.  $f$  は実係数なので実根は 1 個以上あり, 虚根は偶数個で重根ではない.  $\square$

**例 4 (接点  $t$  問題).** 点  $(a, b)$  から曲線  $y = x^3 - 3x$  に引ける接線の本数が 3 本になるときの  $a, b$  の条件を求めよう.

点  $(a, b)$  を通る直線  $y = m(x - a) + b$  と曲線  $y = x^3 - 3x$  が接するための必要十分条件は, 3 次多項式  $f(x) = x^3 - 3x - (m(x - a) + b)$  が重根を持つこと, つまり

$$\text{resul}(f, f') = -4m^3 + 9(3a^2 - 4)m^2 - 54(ab + 2)m + 27(b - 2)(b + 2) = 0$$

が成り立つことである. そして, このような接線が 3 本存在することは, 上の  $m$  に関する 3 次方程式が異なる 3 実解を持つことと同値である. つまり,

$$g(m) = -4m^3 + 9(3a^2 - 4)m^2 - 54(ab + 2)m + 27(b - 2)(b + 2)$$

において,  $\text{disc}(g) > 0$  となる条件を求めればよい.

$$\text{disc}(g) = \frac{-1}{-4} \text{resul}(g, g') = 314928(a^3 - 3a - b)(3a + b)^3$$

より,  $(a^3 - 3a - b)(3a + b) > 0$  が求める条件である.

**定理 5.** 定数でない多項式  $f, g$  に関して以下は同値である.

- (1)  $f, g$  は定数でない共通因子を持つ.
- (2) 以下を満たす多項式  $U, V$  (少なくとも一方は非零多項式) が存在する.

$$Uf + Vg = 0, \quad \deg U < n, \deg V < m$$

- (3)  $\text{resul}(f, g) = 0$ .

**証明.** (1)  $\Rightarrow$  (2)  $h$  を  $f, g$  の共通因子とし,  $f = hf_1, g = hg_1$  とする.

$$g_1 \cdot f + (-f_1) \cdot g = g_1 hf_1 - f_1 hg_1 = 0$$

より,  $U = g_1, V = -f_1$  とすればよい.

(2)  $\Rightarrow$  (1)  $Uf + Vg = 0, \deg U < n, \deg V < m, V \neq 0$  とする.  $f, g$  が共通因子を持たないとする,  $\tilde{U}f + \tilde{V}g = 1$  を満たす多項式  $\tilde{U}, \tilde{V}$  が存在する.  $Vg = -Uf$  なので

$$V = V(\tilde{U}f + \tilde{V}g) = \tilde{U}Vf + \tilde{V}Vg = \tilde{U}Vf + \tilde{V}(-Uf) = (\tilde{U}V - \tilde{V}U)f$$

である.  $V \neq 0$  なので  $\deg V \geq \deg f = n$  より,  $\deg V < n$  に矛盾する.

(2)  $\Leftrightarrow$  (3) 簡単のため,  $m = 3, n = 2$  とする. 一般の場合も同様である.

$$U = \sum_{i=0}^{n-1} u_i x^i = u_1 x + u_0, \quad V = \sum_{j=0}^{m-1} v_j x^j = v_2 x^2 + v_1 x + v_0$$

とおき,  $\mathbf{w} = \begin{bmatrix} u_1 & u_0 & v_2 & v_1 & v_0 \end{bmatrix}^\top$  とすると

$$Uf + Vg = 0 \Leftrightarrow \begin{cases} a_3 u_1 + b_2 v_2 = 0 \\ a_2 u_1 + a_3 u_0 + b_1 v_2 + b_2 v_1 = 0 \\ a_1 u_1 + a_2 u_0 + b_0 v_2 + v_1 v_1 + b_2 v_0 = 0 \\ a_0 u_1 + a_1 u_0 + b_0 v_1 + b_1 v_0 = 0 \\ a_0 u_0 + b_0 v_0 = 0 \end{cases}$$

$$\Leftrightarrow \begin{bmatrix} a_3 & 0 & b_2 & 0 & 0 \\ a_2 & a_3 & b_1 & b_2 & 0 \\ a_1 & a_2 & b_0 & b_1 & b_2 \\ a_0 & a_1 & 0 & b_0 & b_1 \\ 0 & a_0 & 0 & 0 & b_0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} u_1 \\ u_0 \\ v_2 \\ v_1 \\ v_0 \end{bmatrix} = \mathbf{0}_5 \Leftrightarrow \text{Syl}(f, g)^\top \mathbf{w} = \mathbf{0}_5$$

なので,  $\text{resul}(f, g) = \det(\text{Syl}(f, g)^\top)$  と合わせて

(2)  $\Leftrightarrow$  同次形連立 1 次方程式  $\text{Syl}(f, g)^\top \mathbf{x} = \mathbf{0}$  が非自明解を持つ  $\Leftrightarrow$  (3)

を得る. □

定理 5 から定理 1 とその逆が証明できる.

**定理 6.**  $f, g$  は共通根を持つ.  $\Leftrightarrow \text{resul}(f, g) = 0$ .

**証明.**  $f, g$  の一方が零多項式なら他方の根は零多項式の根であり,  $\text{resul}(f, g) = 0$  である.  $f, g$  が共に零多項式ではなく一方が定数なら共通根は存在せず,  $\text{resul}(f, g) \neq 0$  である. そこで,  $f, g$  は共に定数でないとする.

( $\Rightarrow$ )  $f(\gamma) = g(\gamma) = 0$  とすると, 因数定理から  $f, g$  は共に  $x - \gamma$  で割り切れる. つまり,  $f, g$  の共通因子  $x - \gamma$  が存在するので, 定理 5 より  $\text{resul}(f, g) = 0$  である.

( $\Leftarrow$ ) 定理 5 から  $f, g$  は非定数の共通因子  $h$  を持ち,  $h$  の根は  $f, g$  の共通根である.  $\square$

次の定理 7 は, 終結式  $\text{resul}(f, g)$  の値と  $f, g$  の根の間の明示的な関係式を与え, その系として定理 1 の逆を導くこともできる.

以下,  $f(x) = \prod_{i=1}^m (x - \alpha_i)$ ,  $g(x) = \prod_{j=1}^n (x - \beta_j)$  とおく.

**定理 7.**  $\text{resul}(f, g) = a_m^n b_n^m \prod_{i=1}^m \prod_{j=1}^n (\alpha_i - \beta_j)$

**証明.**  $T := \prod_{i=1}^m \prod_{j=1}^n (\alpha_i - \beta_j)$  とおく. 定理 1 から  $\alpha_i = \beta_j$  のとき  $\text{resul}(f, g) = 0$  なので, 因数定理より  $T$  は  $\text{resul}(f, g)$  を割り切る. そこで, 各  $\alpha_i, \beta_j$  の多項式として  $\text{resul}(f, g)$  と  $T$  の次数を評価し, 係数を比較すればよい.

$$\begin{aligned} \frac{f(x)}{a_m} &= x^m + A_1 x^{m-1} + \cdots + A_m = \prod_{i=1}^m (x - \alpha_i), \\ \frac{g(x)}{b_n} &= x^n + B_1 x^{n-1} + \cdots + B_n = \prod_{j=1}^n (x - \beta_j) \end{aligned}$$

とすると,

$$\text{resul}(f, g) = a_m^n b_n^m \begin{vmatrix} 1 & A_1 & \cdots & A_m & & & \\ & 1 & A_1 & \cdots & A_m & & \\ & & \ddots & \ddots & & \ddots & \\ & & & 1 & A_1 & \cdots & A_m \\ 1 & B_1 & \cdots & B_n & & & \\ & 1 & B_1 & \cdots & B_n & & \\ & & \ddots & \ddots & & \ddots & \\ & & & 1 & B_1 & \cdots & B_n \end{vmatrix}$$

である. 各  $A_k$  は  $\alpha_1, \dots, \alpha_m$  の, 各  $B_k$  は  $\beta_1, \dots, \beta_n$  の  $k$  次基本対称式の  $\pm 1$  倍である. また, 各  $A_i, B_j$  はそれぞれ  $\alpha_i, \beta_j$  の 1 次式なので,  $\text{resul}(f, g)$  は  $\alpha_i$  に関して高々  $n$  次で,  $\beta_j$  に関して高々  $m$  次である. 従って,  $\text{resul}(f, g)$  は  $T$  の定数倍であり,  $\alpha_1^n$  の係数を比較して,  $\text{resul}(f, g) = a_m^n b_n^m T$  がわかる.  $\square$

次に, 定理 7 を書き換えて, 多項式の判別式と終結式の関係を導く.

$$a_m \prod_{i=1}^m (\alpha_i - \beta_j) = (-1)^m a_m \prod_{i=1}^m (\beta_j - \alpha_i) = (-1)^m f(\beta_j), \quad b_n \prod_{j=1}^n (\alpha_i - \beta_j) = g(\alpha_i)$$

より, 次が成り立つ.

**補題 2.**  $\text{resul}(f, g) = (-1)^{mn} b_n^m \prod_{j=1}^n f(\beta_j) = a_m^n \prod_{i=1}^m g(\alpha_i)$

## 2 2変数多項式の終結式

### 参考文献

- [1] 長坂工作・岩根秀直（編），『計算機代数の基礎理論』，共立出版（2020）.
- [2] 三宅敏恒，『線形代数概論』，培風館（2023）.
- [3] 横山和弘，『多項式と計算機代数』，朝倉書店（2022）.
- [4] D. U. Cox, J. Little and D. O'Shea, *Ideals Varieties, and Algorithms 4th edition*, Springer (2015).
- [5] S. Lang, *Algebra Revised 3rd edition*, Springer (2004).